

多様な強みを把握するための研究力分析 -AMEDfindとJ-STAGEを用いた試行-



伊藤 広幸 信州大学 学術研究・産学官連携推進機構 hito@shinshu-u.ac.jp
久保 琢也 横浜国立大学 研究推進機構 kubo-takuya-xv@ynu.ac.jp

背景

- 研究IRや評価業務ではKAKENやWoS/Scopusにより調査を行うことが多いが、これらのDBだけでは多様な研究活動の把握に限界がある。
- JSTやAMEDでは日本の論文情報や競争的資金のDBを有しており、研究IRへの活用が期待されるが、容易にデータを取得できるインターフェースが用意されていない

J-STAGEの活用事例

■ データ取得に至る流れ

- 担当者とのデータ利用について相談（2020年6月）
- 覚書を締結することでデータ取得の許可を得る
- スクレイピングによりデータの取得

■ 事例①：運営費交付金「成果を中心とする実績状況に基づく配分」

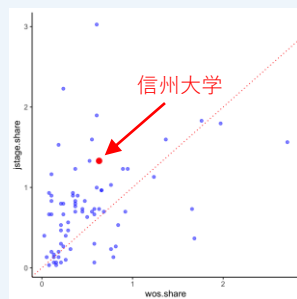
- 信州大学の研究者が関与する論文に対して、右表のような形式でデータを取得
- 手作業も必要であるが、データ整備の省力化が可能
- R3の論文数に関する評価結果「基礎額の115%」に貢献

論文	著者	所属
論文1	著者A	文学部
論文1	著者B	教育学部
論文2	著者C	工学部
論文2	著者C	〇〇研究所
論文3	著者D	理学部

■ 事例②：人社系のベンチマーキング

- 2019年の国立大学の人社系の論文数について、IncitesとJ-STAGEの2軸で可視化（整数カウントの後、全論文数に占める割合を各大学で計算）
- J-STAGE：人社系に分類される雑誌のうち、学会名鑑で人社系に分類される学会が発行する雑誌の論文を抽出
- Incites：Incites Dataset + ESCI、OECDのSocial Sciences, Humanities分野の論文を抽出

異なる角度から各大学の特徴を見ることができそうだが、J-STAGEのデータクリーニングが課題



本発表の目的

- 信州大学ではJSTやAMEDとのコミュニケーションを通じて、J-STAGEやAMEDfindのデータを取得し、より多角的な観点による研究IRや評価業務に取り組んでいる。
- 本発表では、①これらのDBの活用事例を報告するとともに、②研究IRのためにこれらの機関とどのような関係を構築すべきか議論したい。

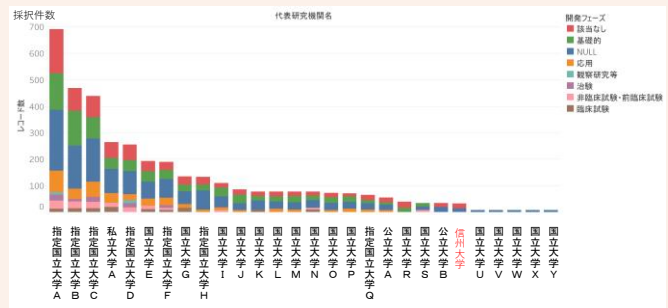
AMEDfindの活用事例

■ データ取得に至る流れ

- AMEDfindの担当者とのデータ利用について相談（2021年3月）
- 個別に問い合わせることでデータ取得の許可を得る
- CSV形式でのデータを提供していただく

■ 事例：医薬・保健系のベンチマーキング

- 大学の強みや特徴を発掘する観点から、2018年～2020年の研究機関ごとのAMEDの採択件数を開発フェーズを考慮した上で可視化
- 医療系の特徴として、資金が高額であり、開発フェーズによって異なる支援が必要とされるため、今後の戦略策定の基礎データとした



今後は、他のデータベース（KAKEN等）との接続による分析の深堀や、結果に基づきどのように戦略策定に活かしていくかが課題

今後に向けて

- JSTやAMEDがデータ提供体制を整備すべきとの声もあるが、ニーズや期待される効果が不透明な中では現実的でない。
- まずは大学側も歩み寄り、現状でもできる努力を行いながら、成果等をアピールしていくことが重要。
- より長期的には、互いのニーズやリソースを理解しつつ、より研究IRに適した環境の構築に繋がってほしい。

ご興味があれば遠慮なく発表者までご相談ください。データの活用方法やクリーニング方法など一緒に考えてくれる人を募集中です。

所感

- J-STAGEやAMEDfindのデータにより、より多角的な観点による研究IRや評価業務に繋がることが期待される。
- 一方で、データ取得までの手続きやデータクリーニングなどの作業は容易ではないのが現状。
- 今後は、データの取得方法や分析方法等の実践知の蓄積と共有が望まれる。

謝辞：本取り組みを実施するにあたり、科学技術振興機構（JST）、日本医療研究開発機構（AMED）のご担当者様に大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。